

令和4年度

# 穴吹中学校 「学力向上実行プラン」

## 学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

○教えから学びへ重点を置く・気づき考え育つ授業改革  
(ファシリテーション×ICT×思考スキル×ふりかえりでつくる学びの場)

## 学力向上検討委員会構成

学力向上推進員	委員
佐藤 美幸	校長 濱田 雅子 1年担任 河見 弘明 教頭 磯村 淳 2年担任 吉浦 早紀 教務 宇山 壮史 3年担任 藤本 修嗣

校長

濱田 雅子

### 【各校の取組状況の把握について】

全職員による授業参観や教員からの報告等、様々な機会を捉え、取組状況の把握を行う。

○次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

### (1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○意欲的に学習に取り組むことができ、与えられた課題等にも前向きに取り組むことができる。 ●定着に個人差が大きく、基礎学力の二極化がみられる。	・セルフチェックしながら自ら基礎基本を徹底する習慣をつけることができる。 ・自ら進んで家庭学習に取り組むことができる。	・タブレットとプリント等によるハイブリッド学習の工夫。 ・授業内容・活動の取捨選択。 ・タブレットを活用した効果的な家庭学習の工夫。 ・朝の自主学習で国語・英語・数学の基礎基本の力を育成。		・アプリ等を使った繰り返し学習が定着し、基礎基本の定着につながっている。 ・生徒自身がICTを使い、興味を持ったことや苦手なことを調べることで知識を得て、定着につながっている。 ・朝の自主学習で範囲を指定して繰り返し学習することで、基礎基本の補強ができた。	・効果的なICTの活用 ・家庭学習の意味づけと自己選択する学び ・授業内容・活動の取捨選択(継続)

### (2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○ファシリテーションの技術が身につく、話し合いを深めることができる。 ●自分の考えをまとめたり新しい考えを想像したりすることに課題がある。	・ファシリテーションの技術をさらに磨き、自分で考えをまとめたり書いたりすることができる。 ・目的に応じて、根拠や理由を明らかにしながら、話したり書いたりすることができる。	・単元を貫いた「問い立て」の確認と、授業構成マネジメント。 ・アウトプットを重視した授業づくり。 ・授業のねらいを捉えたR80の設定。 ・学習活動の取捨選択をすることにより生徒が主体的に活動する時間を生み出す。 ・国語力向上タスクフォースの推進。 ・教科間連携の工夫・実践。		・授業で振り返り(R80等)を取り入れ実践できた。 ・タブレットを活用したり、ホワイトボード・ミーティング®を取り入れたりと、自分で考えをまとめたり書いたりする力を伸ばすことができた。 ・ICTの有効活用により、生徒が考える時間を確保することができた。	・生徒自身が「ここまででは到達したい」と思うような、自らゴールを設定できる仕掛けづくり ・フィードバックの方法をR80だけでなく、録音や録画など生徒に委ねる ・アウトプットを意識した授業づくり

### (3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○ICTの活用等により授業に意欲的に取り組むことができる生徒が増えている。 ●家庭学習に主体的に取り組めていない生徒がいる。	・自らの目標を明確にして計画を立てて取り組むことができる。	・タブレットを日常的・効果的に活用することで、さらなる学習の個別最適化と協働的な学びの推進。 ・目標を明確にして計画を立てることを習慣化。セルフマネジメント力の育成。 ・宿題の意味づけと内容の見直し。		・タブレットを活用することで、個々の生徒に応じた学習方法を選択することができた。 ・アシスタントティーチャーとなって互いに説明し合えるようになってきた。 ・宿題をレポート形式にした結果、自分で方法を考えて取り組むことができた。	・家庭学習をレポート形式にし、自ら課題を設定する、家庭学習に挑戦する。 ・内容ではなく、学び方を身につけさせる方策 ・アシスタントティーチャーを育成して、学び合う習慣をつける。

## 令和4年度 学力向上ロードマップ

